

*** 今日の健康 (8月) ***

＜ 2023年夏ヘルパンギーナ大流行 ＞

ウイルス感染症の「ヘルパンギーナ」は主に幼い子どもを中心に流行する風邪の一種で高熱が続き口腔粘膜の水疱性の発疹を特徴とした急性のウイルス性咽頭炎です。初夏から秋にかけて流行する子どもの夏風邪の代表で重症化すると入院が必要になります。

大多数は「エンテロウイルス属」に属するウイルスが発症原因で、同属の「コクサッキーウイルスA群」である場合が多く、国内の流行は西日本から東日本へと広がる傾向にあります。

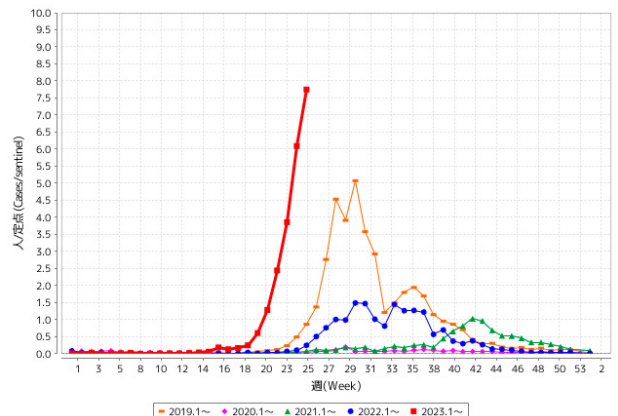
新型コロナの発生以降、昨年まで小規模流行にとどまっていたが、今年の患者数は全国的に6月上旬時点で既に過去3年の流行ピークを超えています。

患者の年齢は5歳以下が全体の90%以上を占め、1歳代が最も多く、次いで2、3、4歳代の順。2～4日の潜伏期を経て突然発熱し、40度の高熱になることもあります。発熱に続いて喉の痛みが出て、咽頭粘膜が赤くなり、口内に直径1～5ミリの小さな水疱ができます。感染症に対する抗ウイルス薬はなく、対症療法が中心で、熱は通常2～4日間程度で下がります。発熱時に熱性けいれんを伴うことや、口内の痛みのために拒食や授乳障害、脱水症などを伴うこともあります。

今年はこの夏風邪が本格的な夏の到来を前に早くも全国的に流行する傾向していることが厚生労働省などの調べで分かりました。

東京都や大阪府などでは既に「流行警報」レベルを大きく超えておりマスク着用や手洗いなどの感染防止策を呼び掛けていますが、ウイルス感染の主体が乳幼児だけに難しい状況です。

東京都は22日、ヘルパンギーナの定点当たりの1週間の患者報告数24週(12～18日)が6.09となり、流行警報レベルの6を超えたと発表しました。翌週の25週(19～25日)は7.75になったと29日に発表し、患者数の増加が顕著になっています。



前澤クリニック 内科・小児科 0422-30-2861
天文台通り もみじ山公園バス停裏